

令和 5 年 5 月 28 日現在

機関番号：82723

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13020

研究課題名（和文）日本語の語順の選択基準の実証研究

研究課題名（英文）An empirical study on the selection criteria for word order in Japanese

研究代表者

今村 怜（Imamura, Satoshi）

防衛大学校（総合教育学群、人文社会科学群、応用科学群、電気情報学群及びシステム工学群）・総合教育学群
・准教授

研究者番号：70829671

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、語順の選択を動機づける要因を明らかにし、多角的な観点から日本語の語順を体系化することである。その目的を達成するために、コーパス解析と文産出実験を行い、機能主義の立場から一般化を試みた。まず、コーパス解析の結果として、主題持続は焦点化だけでなく文法関係の影響も受けるという傾向が観察された。しかし、文産出実験では、主題持続と文法関係の相関関係は疑似相関であるという可能性が示唆された。また、語順や文法関係の機能は個別の構文と相互作用を示すという結果が観察された。たとえば、二受動文では主語の持つ話題持続性が強められるのに対し、ニヨッテ受動文では弱められるという傾向が観察された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、コーパス解析と文産出実験に基づき、語順転換に関与する構文の使い分けの一端を明らかにした。具体的には、かき混ぜ文/分裂文/後置文/受動文の用法を機能的な概念から探求し、個別構文の用法を体系化した。また、コーパス解析に基づいて提案した仮説を文産出実験で再検証し、多角的かつ総合的に語順の選択基準の解明を目指した。その結果として、コーパス解析に基づいて提案した仮説を修正し、複数の手法で検証することの必要性を示した。このような形で語順の選択基準の理解が深まることにより、語順そのものの言語普遍的な特性の解明へ貢献できたと考えられる。こうした言語事実の解明は談話文法理論へ貢献するものでもある。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research project is to investigate the criteria for choosing word orders in Japanese based on corpus analyses and sentence production experiments. By doing this, we propose an encoding system in Japanese in terms of functional linguistics and psycholinguistics. A series of corpus analyses have demonstrated that 'topic persistence' is influenced not only by focalization but also by grammatical functions. Yet, the results of sentence production experiments have suggested that there is a spurious correlation between topic persistence and grammatical functions. Furthermore, it has been observed that the discourse function of each construction interacts with word orders and grammatical functions. For example, it has been revealed that passive subjects tend to be more topical in the ni-passive than in the niyotte-passive.

研究分野：言語学

キーワード：語順 情報構造 コーパス解析 文産出実験 文法関係 重さ 焦点化 有生性

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

日本語は構成要素の配列順序の自由度が比較的高く、基本語順文(太郎がリンゴを食べた)だけでなく、かき混ぜ文(リンゴを太郎が食べた)、後置文(リンゴを食べたんだ、太郎が)、分裂文(太郎が食べたのはリンゴだ)といった語順も文法的である。ここで生じる疑問は、どのような基準に従って語順の選択が行われるのか、ということである。この疑問に関して、伝統的には情報構造や有生性といった機能的な概念から分析が行われてきたが、多くの研究者は個別の構文に焦点を当てており、それらを体系的に扱った論文は少ない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、語順の選択を動機づける要因を明らかにし、機能的な観点から日本語の語順を体系化することである。その目的を達成するために、機能主義および心理言語学の観点から、多角的かつ総合的に仮説検証を行った。

3. 研究の方法

本研究では、コーパス解析と文産出実験を併用することにより、客観的な仮説の形成を目指した。複数の手法を併用することで、実際の言語運用から乖離することなく語順の選択基準を明らかにすることが可能になると考えられるからである。そこで、データ収集の初期段階として、情報構造の観点からコーパス解析を行った。なお、情報構造の解析には、指示距離(RD: referential distance)と主題継続(TP: topic persistence)という概念を用いた。指示距離は「対象となる名詞と、その先行文脈に現れる同一指示対象との距離」を表し、主題継続は「後続文脈に同一指示対象が現れる頻度」を表す。すなわち、RDは先行文脈との関係を、TPは後続文脈との関係を量的に計測することができる。コーパス解析の基準にRDとTPを用いることで、文脈の観点から構文の選択基準の一般化を目指す。情報構造以外の主要な概念としては、「名詞句の長さ」と「有生性」を分析基準とした。これらは先行研究で語順転換へ影響を及ぼす可能性が提案されており、定量的な観点から再検証する価値があるからである。

そのうえで、コーパス解析に基づいて提案した仮説を文産出実験によって再検証した。コーパスでは複数の要因が同時に影響を与えうるため、個々の要因の正確な影響が計測できない。今回の分析では、特に「TP」と「文法関係・有生性・焦点」の相互関係が判然としにくい。そこで、これらの概念の相互関係を検証するために各要因を分離したデザインで実験を行う必要があった。なお、後続文脈に関しては、有生性と情報構造を分離したデザインで談話展開テストを行った。これにより、TPと構文の関係を文産出の観点から客観的に観測することができると考えられる。最後にコーパス解析の結果と文産出の実験の結果を比較検討したうえで各構文の選択基準の一般化を行った。

4. 研究成果

まず最初に、コーパス解析の結果として、文法関係と焦点化がTPと相関するという傾向が観察された。すなわち、主語の方が目的語よりもTPが高いといった階層性が観察され、それとは独立して焦点要素のTPが高くなるという傾向が示された。それに対し、かき混ぜ操作によって前置された構成素は低いRDと相関するがTPとは相関関係を持たないという結果が観察された。これは、かき混ぜ文は「旧から真への情報の流れ」(久野 1978: 54)という機能的制約を満たすために選択されるのであり、後続文脈とは無関係であるということの意味する。したがって、有標な語順はRDの要請を満たすために選択されるという一般化もありうる。そこで、この一般化の妥当性を後置文の解析によって探った。その結果として、少なくとも書き言葉では、後置された目的語が比較的高いTPを保持しているという結果が示された。このことは、有標な語順は個別構文の機能との相互作用として選択されるのであり、RDの要請を満たすために一義的に規定されるわけではないということの意味する。このように、かき混ぜ文や後置文には構文特有の談話機能が存在し、それらが独立した要因としてRDおよびTPに影響を与えるという分析結果が示された。同様に、「二ノニヨッテ」受動文も構文特有の機能を有し、語順や文法関係から独立した要因としてRDおよびTPと相関するという傾向が観察された。共通点としては、「二ノニヨッテ受動文」の主語はRDが小さくTPが大きい要素として働くという傾向が観察された。これはいずれの要素も主語であるという共通の文法関係に起因するものであると思われる。それに対し、構文特有の機能としては、二受動文の主語が広い範囲のトピックとして働くのに対し、ニヨッテ受動文の主語は比較的狭い範囲のトピックとして働くという傾向が観察された。このように、「二ノニヨッテ」受動文の使い分けは、部分的には後続文脈における働き方の相違という観点から説明ができる。コーパス解析の結果は、文法関係や個別構文の談話機能から影響を受けつつ語順が選択されるということを示唆するものであった。ところが、こうした結論はコーパス解析にのみ基づいたものであり、単独の手法から結論を導き出すのは危険である。そこで、コーパス解析に基づいて提案した仮説を文産出実験によって再検証した。その結果として、Imamura & Seraku (2002) では、文法関係とTPの間には疑似相関が存在しているという可能性を指摘した。

具体的には、文法関係と有生性の間には相関関係が存在し、有生性と TP の間にも相関関係が存在する。それゆえ、文法関係と TP の間に疑似相関関係が生じているという可能性を示唆する実験結果を観察したわけである。以上のように、単独の手法から結論を導き出すのは危険であり、複合的な観点から仮説検証を行うことで、より客観的な仮説へと到達することができるということが示された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Imamura Satoshi	4. 巻 272
2. 論文標題 A corpus analysis of two by-passives in Japanese from the viewpoint of information structure	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Lingua	6. 最初と最後の頁 103285 ~ 103285
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.lingua.2022.103285	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 今村 怜
2. 発表標題 後置文の機能的分析
3. 学会等名 日本言語学会第161回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 今村 怜
2. 発表標題 日本語における分裂文の談話機能について
3. 学会等名 日本言語学会第160回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Satoshi IMAMURA & Tohru SERAKU
2. 発表標題 Animacy, grammatical relations, and topic continuity in Japanese: An experimental approach
3. 学会等名 The 35th Paris Meeting on East Asian Linguistics (JLA035) (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------